

新発見! 佐々紅華 巨匠がつながる — 紅華と三浦環 —



長崎グラバー園内の三浦環像

「ある晴れた日 遠い海のかなたに」の Aria で有名な歌劇《蝶々夫人》第2幕。オペラにあまり興味のない方でもこの一節は学生のころ音楽の時間で聞いたことがあるかもしれません。

歌劇《蝶々夫人》は、イタリアの作曲家ブッチェニ（1858～1924年）が明治初年の日本を舞台に作曲したオペラ。15歳で

アメリカ海軍中尉ピンカーターの妻となった蝶々さんこと蝶々夫人がその愛に破れ自刃に至るとい物語です。当てもない帰還を信じて歌うせつない曲が有名な Aria 「ある晴れた日に」です。そして、このオペラを海外を含め2000回以上も舞台上で演じたのが「世界のプリマドンナ」と称された TAMAKI MIURA 三浦環（元の名は柴田 環1884～1946年）なのです。世界的に最も権威のある音楽文献として知られている「グローヴ・オペラ辞典」。その中で日本人としてただ一人、三浦環の名前が掲載されています。三浦環は東京音楽学校で「荒城の月」の作曲者 滝廉太郎からピアノの指導を受け、やがて助教授となり山田耕筰らを指導し、明治44（1911）年には帝国劇場に所属しプリマドンナとして活躍を続けます。

さてそんな時代の音楽事情は、いったいどんな様子だったのでしょうか？唯一アメリカや西欧から船便で1カ月以上もかけて輸入されるレコードとそれをかける蓄音機のみが洋楽の世界を伝えていた時代です。明治維新から40年余り、日露戦争でロシアを破った日本は文化・芸術の面でも「開花期」を迎えようとしていました。戦勝国とは名ばかりで財政逼迫の中、伊藤博文や井上馨などの助言で日本で初めての本格的西洋式の「帝国劇場」が開場するのが明治44年3月のこと。会長には渋沢栄一、取締役は大倉喜八郎ら財界人を置いたスタートでありました。「帝国」という名前は付いていましたが、民間の財界人によって開場されたのです。帝劇では歌舞伎などの日本の古典芸能からオペラ・新派劇までさまざまな演目が上演され「今日は帝劇、明日は三越」という三越デパートの広告が、当時の有閑富裕階級の女性の象徴と一般庶民に印象付けた時代でした。

実は帝国劇場開場の数年前、寄居の「雀宮」に別荘を持つことになる七代目松本幸四郎と佐々紅華との縁がはじまります。九代目松本幸四郎が若い頃「ラマンチャの男」などのミュージカルに挑戦していたように、七代目も日本製新作オペラ「露営の夢」を歌舞伎座で上演（明治38年）、佐々紅華は幸四郎の助演歌手として25日間歌舞伎座へ通い詰めたことと自伝に書いています。当時の評論には『まるで狼の遠吠えのようであった』とあります。「追っかけ」が高じてのことでしょうか。

肝心のオペラはどうだったかという、帝劇はイタリアからローシーというオペラ教師を迎えて奮闘しますが、結局は赤字続きで挫折します。

帝国劇場開場、本格的西洋オペラの上演という、まさにこの時期に、後に世界のプリマドンナとして名声をさせるオペラ歌手 三浦（当時姓・柴田）環と数年後の大正6（1917）年、「エンコ」とさげすまされていた浅草六区で自作オペレッタ「カフェーの夜（おてくさん、コロケーの唄など）」を上演、浅草オペラの嚆矢となった佐々紅華が結びつくのです。

明治45（1912）年5月5日発行の三浦環著「世界のオペラ」の装丁を手掛けたのが、当時日本蓄音機商會に勤めていた26歳の佐々紅華です。本の表紙は藍色をベースに荒川の流れを思わせる銀盛り、川上に金箔を配し川の流れて沿って桜の木が描かれています。「柴田環著 世界のオペラ」そして佐々紅華の「紅」と刻まれた印章、これにも金箔が張られています。



桜の右下に「紅」の一文字（金箔）

「世界のオペラ」の巻頭には、渋沢栄一、後藤新平らによる寄稿、三浦環自身による11ページになる前書きがあります。本の内容は、カルメンなど世界の有名なオペラ70曲の作曲者、登場人物、あらすじ等が書かれており、オペラの手引書とも云うべきものであります。

三浦環の前書きの中にある「音楽に国境なし」という一節を読みはじめると、それは明治・大正・昭和という時空を超えて、音楽のジャンルをも超え、「開花期」を迎えていた時代の人たちの熱い思いが伝わってくるような気がします。

月17日（1868年9月3日）に江戸が東京に改められ、同年10月13日に天皇が東京に入りました。明治天皇はその日から4日後の10月17日に大宮の水川神社を武蔵国の総鎮守とし、「勅祭社（ちよくさいしや）」と定めたのです。そして10日目には早くも大宮に行幸し、翌28日には自ら祭儀を行いました。それは関東のすべての神社の中で最初であり「特別扱い」されています。（注2）

では、寄居とはどのようなかわりがあるのでしょうか。裏付ける論拠はありませんが、この地を治めた戦国武将の多くが「風水」を良くし、築城や治水灌漑事業の際に地理風水の考えをもつてことに望んだことは想像に難くありません。

時代は変わりますが、明治維新後の自由民権運動のさなかに起こった「秩父事件」の際には、寄居を宮城（皇居）への最後の砦として警察・消防団が警護に当たったと聞いたことがあります。鉄道が3線も乗り入れ交差している寄居。寄居は「荒川」が関東平野へと向かう扇状地の扇の要にありま

定を保っているのかもしれませんが、参考までに地風水に詳しい方のお話を掲載しておきます。寄居は「おおざつばに言う」と、背後に山があり、流水がぐるりと取り巻いている平地を明堂（めいどう）と呼びますが、英雄を産み、歴史的な発現があるとされる特別な場所です。しかも、北に山、西から南、そして東へと川が流れているので、地理風水（陰陽道）の理想の地形である「四神相応」にもなっています。これが大きく変わったのが、戦後日本の高度経済成長期。さまざまな

宮家の疎開
皇族の方が度々寄居の地を訪れているのは、何かの偶然なのでしょう。山先の大戦で戦火が激しくなると、山



京亭で植樹をする貞明皇太后、右手前が佐々紅華。

地理風水にみる寄居町
ここでちよつと皆さんが地風水師になつた気分、関東平野を見下ろしてみてください。特別扱いされる山が3つあります。

これら3つの点を無数の線で結んでみると鉢形城や寄居が浮かび上がってきます。富士山と筑波山を結ぶ線と浅間山と千葉の古墳群を結ぶ線（冬至の日の出）の交点には、武蔵国一の宮・氷川神社があり、武蔵国二の宮・御室山があります。（注1）関東で最も古く、最も大きな神社です。そしてその線上に位置するのが鉢形城と寄居であり、その西北には武蔵国二の宮金鑽神社の御神体御室山があります。冬至の日の出



方向に、一直線上に並ぶのです。不思議ですね。富士山や浅間山の噴火によってできたと思われる関東平野の地。慶応4年7

大正ロマン 昭和モダン

TAISHO ROMAN SHOWA MODERN

玉淀文化の歴史を探る②

鉢形城、眼下を流れる荒川。「城下（しろした）」と呼ばれていた明媚な河原が「玉淀」と名付けられたのが昭和6（1931）年のこと。古くは室町から戦国時代に、長尾景春や江戸城を築いたとされる太田道灌、北條氏邦ら群雄が割拠した時代もありました。時代は下って明治・大正・昭和、この地を訪れたひとにスポットを当ててみました。